

一月二五日（水）

小野寺さんの隣で、少し潰した中華ポテトの刺さったフォークを掲げたまま、娘の映美が船を漕いでいた。数分前までは睡魔に抵抗していたようだけど、流石に限界らしい。席を立ち、映美の手から何とかフォークを外してベッドまで抱えていく。

小野寺さんは、小皿に残った焼き飯とエビチリを口に運びながら、私が戻ってくるのを目で追いかける。自分の席に戻って、彼女のカップへお茶を注ぎ足した。小野寺さんは自分の口元を抑え、彼女と一緒に持ってきたペーパーナプキンでエビチリのソースを拭う。

「すみません。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそすみません。お昼までご馳走になっちゃって」

正午より少し早いタイミングで、雁飯店のテイクアウトを提げた小野寺さんがやってきて、映美と共に美味しい中華をいただいでしまった。自分たちの分を払おうと思ったけど、彼女は「商談ついで、経費にできると思うので」と断った。

娘の食べかけを口に運んだ。

「上のお子さんは、幼稚園でしたっけ。旦那さんは」

「今日は珍しく外出してて、武藤さんのオフィスで打ち合わせ、だって」

三年前頃から基本的に家にいて、普段から積極的に家事も育児も手伝ってくれている。亜衣が帰ってきたらちよつと大変だけど、彼は映美が起きる前には帰ってくるだろう。

「ふーん」と頷いていた小野寺さんは、自分の用事を思い出したように、持ってきた荷物をゴソゴソし始めた。私と彼女の前にあったお皿を流しに片付け、彼女が包装紙で包まれた箱を置く前に、軽く布巾でテーブルを拭いた。

「ああ、すみませ〜ん」

「いえいえ」と返していたら、小野寺さんは先ほどの箱をそこに置いた。

「年始の会に芽衣さんだけ来られなかったんで、改めてご挨拶に」

「あら、そんな。わざわざ、ありがとうございます」

包装紙を剥がし、箱を開けると中は個包装の洋菓子、ラングドシャツっぽい焼き菓子が入っていた。彼女には先ほど、お父さんからもらったと言う神戸のチョコレートもいただいている。

「こんなに色々、良いんですか？」

「良いんです、良いんです。今年も、よろしくお願いします」

小野寺さんの動きに釣られ、こちらでも座ったまま頭を下げる。

「せっかくなんで、コーヒーどうですか？」

「お言葉に甘えて、いただきます」

さつきいただいたチョコレートも、横に出そう。電気ポットに水を入れ、スイッチを入れる。お湯が沸くまでに、食卓を片付け、流しの食器を洗っていく。台所で洗い物をしている間、小野寺さんは椅子を離れて食卓の周りを見て回る。

「え、康徳さん、文学賞取ってるんですか？」

カラーボックスの上に飾った賞状に目を止める。

「地域の小さな賞だから、何にもならないんですけどね」

二つ、三つ、似たような規模の賞状を置いてある。その隣には、五冊の冊子も並べてある。小野寺さんは美容雑誌でも手に取るように、一冊抜き取った。そのまま自然に、パラパラめくる。

「これも、康徳さんの？」

「彼が学生時代に作っていた、同人誌」

小野寺さんは軽いトーンで「へー」と最後までめくって、冊子を元に戻した。

彼女のコーヒーを入れ、食卓に置く。小野寺さんは「ありがとうございます」と言いながら、席についた。彼女は「そっか、書けるんだ」と呟いて、コーヒーを飲んだ。

初出 令和三年二月一八日 アルファポリスにて公開